



神輿修復完了清祓祭記念(昭和57年9月)

昭和五十七年五月両神輿の老朽化に伴い、氏子に六〇〇万円の奉賛を仰ぎ修復する事となり、山本神仏具店(津山市中之町)に施行を依頼した。
 修復過程で、両神輿に書き付けを発見し、製作年は文化十一年(1814)で大阪御堂前安土町大川屋・山内又三衛門の作である事が判明した。
 昭和五十七年九月には新調時の、金色の輝きを取り戻した神輿が帰社し、清祓の後この年の神幸祭から、氏子に披露した。

御霊信仰

日本において、人々を脅かすような厄災(天災・伝染病等)の発生を、怨みを持って死んだり、非業の死を遂げた人間の怨霊、御霊のしわざと見なして畏怖し、それを鎮めて祟りを免れ、平穏と繁栄を実現しようとする信仰。

供膳所

当社特有な建物で、一般神社では神饌所にあたるが、当社では神饌所とは別に春秋の大祭に神に供える「供膳」を調理し、整える事を目的に建てられている。

都窪郡誌によると、「神供所」の名称で寛延二年(1749)建築とあり、その後の改築は不明であるが、昭和三十九年及び平成十二年に屋



供膳所

根の修理を行っている。

供膳所の内部は御盛相を蒸す釜部屋と供膳を整える神饌部屋に分かれており、神饌部屋には奥津日子神と奥津比売神(何れも大歳神の御子で、竈の守護神とされる。)を祀る神祠が備えられている。

当社には、明治二十八年に拝殿に付随して建築された神饌所があるが、それとは別に供膳所が建てられているのは、十九台にも及ぶ御膳と大三方を整え配列する広い場所や、御盛相を蒸すために竈に火を使うので、火災防止を考慮して、本殿からなるべく遠い境内の東端である東参道口に建設されたものと思われる。

また、竈の神を祀っている事や、神に供える御盛相を作る建物という意味から、米を供える参拝者が多い。

手水舎

神社に参拝をするとき、手水舎の水で両手を清め、口をすすぐ。このことを「手水を使う」といい、神社には社殿に入る前に手水舎が設置されている。

両手を清め口をすすぐことにより、心(魂)と身体を洗い清めるという意味があり、きれいな心と身体で参拝する為の準備を整えるための



神饌部屋に祀られている竈の神の神祠



手水舎正面

建物である。

手水鉢だけで屋根の無いものは、工作物として扱われる。

当社の手水鉢は「手水石」と刻まれており、宝永二年(1705)施主佐藤助左衛門の銘がある。また、手水舎は記録によると、昭和十年に正面鳥居脇に移転したとされる。

昭和十年は随神門の改築に取り掛かった年である事から、以前は随神門の付近にあったが、随神門の規模を拡大したために障害となり、現在の場所へ移築したものと思われる。

昭和四十二年十月には通行中のトラックの積載物が屋根に接触し、倒壊したが、当事者が復元した。平成十二年五月には龍ノ口と玉石を設置し、平成十七年六月には照明器具を設置した。

手水の使い方

まず、右手で柄杓を持ち、水をくんで、その水を左手にそいで左手を清めます。
 ついで、柄杓を左手に持ち換え、同じように右